



ゾルゲ工作と 日独ソ関係

資料で読む

第二次世界大戦前史

富田 武

Н О

独
赤

永岑三

序言——本書の研究史上の意義

二〇二四年は、リヒャルト・ゾルゲおよび尾崎秀実が処刑されて八〇年になる。この二人を中心とする「ゾルゲ諜報団」については多くの著作や資料集がある。冷戦初期のC・ウィロビー（福田太郎訳）『赤色スパイ団の全貌——ゾルゲ事件』（一九五三年）を嚆矢とするが、アメリカ占領軍による対日反共工作の宣伝文書にすぎない。

従来のゾルゲ本を振り返る

冷戦緩和期に入ると、みずず書房がいち早く『ゾルゲ事件1〜3 現代史資料1〜3』（一九六二年）を、警察調査や裁判記録などを集大成して刊行した（『ゾルゲ事件4 現代史資料24』は一九七一年。以降、「現代史資料」以下は略す）。ソ連では一九五六年のN・フルシチョフによるスターリン批判を受けて、彼の退陣間際（一九六四年九月）に、ゾルゲが日本の「北進」||ソ連攻撃から祖國を救った英雄として顕彰されるようになった。この頃から一九三〇〜四〇年代のスターリン弾圧の犠牲者の名誉回復も進められ、M・トゥハチエフスキーらの軍人については、専



リヒャルト・ゾルゲ(1895~1944)。F・W・ディーキン『ゾルゲ追跡』口絵より

門誌の『軍事史雑誌』にその軍事理論ともども復権され、伝記も刊行された。欧米のジャーナリストがゾルゲについて書きはじめたのも一九六〇年代後半である(主要著作は巻末の「参考文献」を参照されたい)。彼らが書いた「スパイもの」は、史実よりもストーリー性を重視し、優れた知性と破天荒な行動力をもつ、酒と女性をこよなく愛した「超一流スパイ」ゾルゲ像を普及させることになった。

著者は、ゾルゲの存在を広く知らせるうえでジャーナリストの果たした役割を否定するつもりはない。ただ、彼らが国家機関の情報活動を「スパイ」と安易に一括する一方、学術研究、資料公開がブレジネフ期にいったん停滞したこともあって、いまだに不十分だと言いたい。たしかに、ペレストロイカ後に公文書が徐々に機密解除され、右『軍事史雑誌』などに掲載され、研究もある程度進んだ。一九九八年にロシアと日本の研究者が一堂に会して行われた国際シンポジウム「二〇世紀とゾルゲ事件」には、ロシア側からユ・ゲオルギエフら、日本側から石堂清倫、渡部富哉わたべとみよら元コミニストたちが参加した。そのまとめともいえるべき著作が、白井久也・小林峻一編『ゾルゲはなぜ死刑にされたのか——「国際スパイ事件の真相」』(社会評論社、二〇〇〇年)である。二〇〇三年には、篠田正浩監督の

映画『スパイ・ゾルゲ』が公開され、このテーマが若い人たちにも広く知られるようになった。ロシアでは著作、資料集がいくつかが刊行された。V・ガヴリーロフ、E・ゴルブノーフ『ラムザイ作戦——リハルド・ゾルゲの栄光と悲劇』(二〇〇四年、リハルドはロシア語表記、ラムザイはコードネーム)がそれで、世界戦争阻止のための活動の「栄光」、I・スターリンと軍国日本による弾圧の「悲劇」を、資料を駆使して活写した。続いて、M・アレクセーエフ『貴方に忠実なラムザイ——リハルド・ゾルゲと日本における軍事諜報活動』(二巻、二〇二〇年、「貴方」とはスターリン)は、諜報団の財務や人間関係を含む公文書の集成という点では群を抜くものだった(ただし、報告と回想が入り混じり、原資料と編者の評価が混在して読みにくい)。

さらに、A・フェシユン編『ゾルゲ事件 電報と書簡——一九三〇—一九四五年』がある(二〇一八年、その一部が『ゾルゲ・ファイル』として名越健郎・陽子訳で、みずす書房から二〇二二年刊行)。とくに一九三九年八月独ソ不可侵条約締結から四一年六月ドイツのソ連侵攻までの劇的な外交的駆け引き、ゾルゲによる「友人」O・オット(在日ドイツ大使館駐在武官→駐日ドイツ大使)への工作を含む巧みな諜報活動を、仔細にフォローできる資料集である。

本書の狙いと考察の視点

著者が長年少しずつ読み、書いてきたゾルゲについての著作を思い立ったのは、O・マシユーズの『ゾルゲ伝』が翻訳、刊行された二〇二三年五月のことである。しかし書く以上、従来

の資料集をフル活用し、既存の研究書にない斬新な視点に立つたものでなくてはならない。そこで、ゾルゲの日本における活動（一九三三〜四一年）を第二次世界大戦への道程に位置づけ、しかも、日本ではまともな研究がほとんど存在しない当該期のソ連軍事・軍部史と重ねることにより、新たな知見が生まれると考えた次第である。

日独同盟は当然の前提のようだが、一九二〇年代は独ソ関係の方がラパッコ条約と秘密軍事協定により友好的だったし、中国をめぐるのは日独の利害対立が一九三七年まで続いていた。A・ヒトラー政権が成立して四年後の赤軍「肅清」の対象者は、右秘密軍事協力を進めてきたトゥハチエフスキーら軍近代化派で、「ドイツ内通」の罪を被せられたのである。スターリンと国防人民委員のK・ウオロシロフは彼ら高級将官たちを処刑することによってドイツの軍事的優位を招いてしまい、スターリンが対フィンランド戦争辛勝の責任を取らせてウオロシロフを罷免し、トゥハチエフスキーの「縦深作戦」を復活しても、ドイツの対ソ攻撃の緒戦は敗北の連続だった。

ゾルゲの所属した労農赤軍参謀本部諜報総局GRUは、Y・ベールジン、次いでS・ウリツキーが率い、しかも二人は、スペイン軍事顧問団長として、現地を知らずにスペイン政府・軍に指図するウオロシロフと対立し、召喚、処刑された。ゾルゲは一介の諜報要員だったから、一九二〇年代後半から続いた軍近代化論争（騎兵派VS機甲派）でいづれかに与したわけではないが、ベールジンを尊敬していたため、機会があれば「独ソ二重スパイ」として肅清された可能性が高い。辛うじて免れたのは、ドイツ大使館（オット）情報の確度の高さから、スターリンも利用価値を認めていたからである。

ソ連は「一国社会主義」＝資本主義・帝国主義による包囲のゆえに、革命当初から諜報・防諜活動をほかの国々以上に重視してきた。経済的・軍事的な後進性を自覚していただけに、それを補う必要があった。対外諜報機関グルーのほか、国内治安機関のオゲペウが外国部を有し、競合しながら、各国の大公使館駐在武官として、また民間団体にも浸透して、エージェント（協力者）を獲得したのである。しかし、一九二〇年代末からのスターリンによる権力独占にともない、グルーもオゲペウ（後身のNKVD国家保安総局）も共産党書記長の直轄となり、三〇年代の「大粛清」の担い手となり、自身も犠牲者を出した。むしろ、ナチ・ドイツには親衛隊保安部や国防軍防諜部があり、日本でも対外諜報は特務機関、防諜は憲兵隊が担ったが、ソ連は二つの機関が完全に分立し（情報交換さえ禁止）、スターリンだけが情報を独占し、権力強化の手段とした点に特徴がある。

一般に情報（諜報と防諜）は通例、手段に着目して、(a)オシント（open-source intelligence）、(b)ヒューミント（human intelligence）、(c)シグニント（signal intelligence）に区分される。(a)は新聞・雑誌など公刊資料に基づく情報、(b)人間同士の会話や所作などにより得られる情報、(c)無線通信・電話情報、現代では電子情報である。ゾルゲが得た情報は、(a)としては、オットや新聞・雑誌、記者会見や旅行から得られたもの、(c)としてはM・クラウゼンが担当した無線暗号通信があり、

この分野ではアメリカのマジックのような水準にはおよばなかった(日本も)。(b)はゾルゲ自身の情報活動の得意分野で、エージェントでも紙類の手渡しは危険なので、街頭、公園などで短時間に会話し、また一般の人が近づけない料亭やレストランが用いられ、ゾルゲには銀座のラインゴールド(石井花子と出会う)やローマイヤなどの行きつけの店があった。

ジャーナリストのゾルゲに関する著作は、機密情報のもつ外交的・軍事的意味の分析よりは、右のヒューミントにとまなう女性関係やハニー・トラップを含む「人間臭さ」に引きずられる傾向がある。日本の軍人もハニー・トラップにかかりやすかったといわれ、ハルピン特務機関長、次いでノモンハン戦争で第二三師団長を務め、大敗した小松原道太郎も、モスクワ駐在武官当時の弱みを、その後も継続的に利用されたという論文さえある。上司のウリツキーはゾルゲに「君はシャーロック・ホームズではない」と冗談めいて書いたことがあるが、軍事諜報員は民間の探偵のように「甘くはない」と言いたかつたのだろう。実際、本書が描いたようなゾルゲの苦悩とストレスは歴史家の想像をはるかに超えるものがある。

いまひとつ見逃してはならないのは、諜報機関が敵国の情報を獲得するのみならず、進んで破壊工作に従事したことである。戦争の準備は、兵器や兵員の配備、編成、演習のみならず、敵国内での事前の破壊工作(基地や武器庫など)や後方攪乱活動(交通・通信網)、さらには占領統治の準備を含むものであり、諜報活動と敵の防諜活動のせめぎあいの場にほかならない。満洲の関東軍は白系(帝政復活、反ソの)ロシア人の団体と部隊を設立し、ソ連はその団体(白系露人事務局)にはソ連工作員を潜入させていた。ソ連の満洲侵攻後一週間もしないうちに、「スメルシュ」が日本の特務機関幹部を一網打尽に捕え、まもなく軍法会議にかけて銃殺している(情報受け渡しの現場を押さえ、物証を掴んでではなく、特務機関員という職務だけで)。日ソ間の満洲を舞台とする熾烈な諜報戦争は、コラムⅡ(123ページ)にも書いたが、のちに詳述する。

情報活動と外交

ゾルゲらの活動は、敵国近くに配置された諜報要員のそれとは異なり、入手した情報を整理、分析して電信で(一部は外交便で)モスクワ本部(諜報総局)に送ることが任務だった。また、駐在武官とは異なって他国の武官や外交官、政治家との公然たる接触は禁止されていたから、こうした制約のなかで確度の高い情報入手し、電送することは容易ではなかった。来日一年余りはたいした成果を上げられず、本部から叱責されることも少なくなかった。

しかし、ゾルゲはドイツ紙特派員の肩書で在日ドイツ大使館に出入りし(ナチ党員にまでなつて)、駐在武官オットの信頼を得てからは、やがて防共協定を締結する相手、当時は中国と友好関係にあったドイツの情報入手できるようになった。ゾルゲは二・二六事件(一九三六年)の優れた分析で、モスクワ本部からも信用されるようになった。反面、軍事同盟への強化を希望する日本の親独派の期待に反するようなドイツ内「対日慎重論」(日本の軍事力・経済力を過小評価する)もあって、ゾルゲは外交活動の難しさを痛感し、同時に日本政財界に根強い親英米感

情を知ったはずである。

日独関係の難しさは、二〇〇八年に刊行された工藤章・田嶋信雄編『日独関係史』Ⅱの第二章でドイツ人研究者が指摘した。また、本書脱稿後にB・マルティン『太平洋戦争と日独戦時同盟』(原著一九六八年)が訳出、刊行され、日独間に参謀本部レベルの定期協議さえなかったことに、米英間には協議はむろん、共同作戦すらあったことを知るだけに、衝撃を受けた。

一九三九年八月の独ソ不可侵条約の締結は、世界にとっても日本にとっても「青天の霹靂」であり、日本の対独提携論に打撃を与え、親米英派を活気づけたが、ゾルゲはなにも語っていない。ナチズムには反対していたから、ソ連外交の「生き残りのための」便法と了解していたのだろう。翌年のドイツによる欧州大陸制圧に、世論は「ドイツに続け」と沸き立ったが、本人は当然のことながら沈黙していた。次に想定されるソ連攻撃を警戒していたからである。

また、南部仏印(フランス領インドシナ)、蘭印(オランダ領インドネシア)がやがて日本の占領対象に含まれ、日本が「南進」論に傾き、アメリカが対日警戒を強める趨勢は理解していたようだが、四一年四月の日ソ中立条約締結によっても「北進」論に対する警戒は解いていなかった。八月の「関東軍特種演習」にも細心の注意を払っており、九月六日の御前会議で「南進」が決定されてホツとし、モスクワ攻撃に対して極東、シベリアのソ連軍が約二〇万人(規模は本人は知らない)西送されることを知って胸をなでおろしたのではないか。一日にはオット大使から、ドイツは日本が(少なくとも今年中には)対ソ参戦しないと判断したことを聞いている。自

分の任務終了後、一〇月ゾルゲ諜報団は日本官憲によって一網打尽に検挙されたのである。

ゾルゲとは誰か——追悼文から

最後に、ゾルゲという人物の紹介として、異例だが一九六四年九月の墓前で読みあげられた追悼文の邦訳を示すので、最初のステップとされたい。「祖国と世界平和のための戦士」という讃辞が強調されているが、前後のどの時期よりもイデオロギー色が薄められている。

【資料①】ゾルゲとは誰か——追悼文から(「ブラウダ」一九六四年九月四日、東京多摩にて)

ゾルゲの墓は、東京郊外の高磨霊園にある。どこか狭い山裾に墓標が並んでいる普通の日本人の墓とはまったく似ていない。多磨霊園は、並木道が幾重にも走る広大な公園である。墓石は鬱蒼とした灌木に隠れている。

「こちらへどうぞ」と日本の友人の誰かが小声で話した。われわれには、灰色の花崗岩の墓標に刻まれたカタカナとラテン文字が目についた。「リヒャルト・ゾルゲ 一八九五—一九四四」。

日本の習慣で、墓石には水がかげられ、石井花子

さんは灰色の着物に白い帯姿で、線香に火を点けて、法事の香とした。墓標の裏側には「ここに、反戦と世界平和……に命を捧げた英雄が眠る」と記されていた。われわれは同志リハルド・ゾルゲ、コミュニストにして諜報員たる英雄の墓碑に首を垂れた。

石井さんは感動を隠すことなく、「ソ連の方々が墓参に来られることはわかっていました」と語った。もっと早く実現すればよかったものを、諸事情からリハルド・ゾルゲと同志の諜報員たちの不滅の業績の真実を語ることに遅れてしまった。いまようやく、

後世の人々にとって世界平和の大事業に貢献したシンボル、勇気と英雄主義のシンボルになる人物について語れる時が来たのである。

*

一九三三年夏、東京にドイツ紙『フランクフルター・ツァイトウング』『ペルリーナー・クリエール』オランダ紙『アムステルダム・ハンデルスブラド』特派員が到着した。四〇歳くらい、背が高く意志の強そうな男だった。どこか人を惹きつけるところがあり、片足を軽く引きずっている（第一次世界大戦での負傷のため）ことがエレガントに見える。

このドイツ人新米特派員は、たちまち日本社会に食い込んだ。自分が才覚あるジャーナリスト、話し上手、日本問題のスペシャリストであることを示したからだ。

ドイツ大使館では、ジャーナリストとしていっそう高く評価された。まもなくドイツ人社会の中心人物、在京ナチ党組織の最有力メンバーの一人となった。とくに緊密な関係を結んだのは駐在武官のオイ

ゲン・オットで、彼は一九三八年に全権大使となった。

大使ディルクセンはゾルゲを大使館報道官に任命した。ドイツ帝国の法律では、民間紙のジャーナリストがこうした官職を兼ねることはありえない話だった。大使は才覚ある特派員へのサーブに強い関心があり、きわめて重要な情報も入手した。ゲシュタポ諜報網の極東責任者マイジンガー大佐は、この魅力的なジャーナリストと友情を維持し、彼のナチズムへの献身を疑いもしなかった。

報道官は、大使館の最重要機密にアクセスできた。ゲシュタポのエージェントは、リハルト・ゾルゲ博士のことをよく知っているつもりでも、じつはなにも知らなかった。後になって知って頭を抱えたのである。

*

リハルト・ゾルゲは、ドイツ人コミュニストで、一八四八年革命の参加者フリードリッヒ・アルベルト・ゾルゲの孫だった。第一インターナショナルの

著名な活動家で、マルクスとエンゲルスの友人だった。

リハルトは一八九五年、ロシアのバクーで生まれた。母はロシア人だった。父はドイツ人の会社に属する石油工場の技師だった。リハルトが三歳のとき、一家はベルリンに移住し、ドイツ帝国で成長し、教育を受けた。

第一次世界大戦が勃発すると、ゾルゲは軍に召集された。一九一六年まで前線にいたが、二度負傷して入院した。ここで初めて左翼社会主義に接した。

ロシアでは大十月革命が起こった。ドイツが沸き立ち、カイゼル体制は崩壊した。ゾルゲは一九一七年から独立社会民主党員になり、革命運動に積極的に参加した。キール、ハンブルクでは煽動員を務めた。一九一九年二月にはドイツ共産党に加入した。この年ゾルゲはハンブルク大学で政治学博士号を取得した。

一九二〇年ドイツ将校団上層部は、君主制を復活させようとカップ一揆を起こした。ゾルゲは、この

レーニンのいうドイツのボルネーロフ反乱の鎮圧に積極的に参加した。政権の座に復帰した社会民主党指導部は、反革命と闘った者たちを弾圧した。ゾルゲは地下活動を余儀なくされた。アーヘン近くの炭鉱で働き、オランダで雑役工として働いた。ヴェルタルでは党学校で教え、ゾーリンゲンで共産党系新聞の編集者となった。

一九二五年、ゾルゲには祖国ソ連に行くチャンスが生まれた。モスクワに移り、ソ連市民ゾルゲは全連邦共産党に入り、党活動に従事した。

不安な数年が近づいてきた。西欧ではドイツ報復主義が、東方では日本軍国主義が台頭した。資本の世界は経済危機からの出口を、新たな戦争の冒険と他国の領土占領に求めている。

一九二九年、自分の力、エネルギー、能力を諜報活動に投入することに決した。ドイツで以前に重ねた経験から感じ、気づいたファシズムの危険との闘争にもっとも有益だと考えたのである。

上海での緊迫した数年の活動を経て、『フランク

フルター・ツァイトウシク』特派員は東京行きを決めた。ドイツでヒトラーが政権を奪取した一九三三年のことだったのは、けっして偶然ではない。

*

ファシズムとの、新世界大戦との闘争はゾルゲの人生の意義となった。

ゾルゲは東京のドイツ大使館職員の完全な信頼を獲得し、それが彼に大きな可能性を開くことになった。オット大使は報道官に最高度の機密文書を見せ、日本政府との関係についても助言を求めた。

この有能な諜報員を助けたのが、日本人愛国者たちだった。彼らは、日本をファシスト・ドイツに引き寄せ、侵略へと導く軍国主義者たちの政策の破壊的性格を知っていた。とくに積極的な役割を果たしたのが、日本政府の公式顧問だった尾崎秀実である。彼は、三度にわたって内閣を組織した近衛公爵の側近グループに入っていた。

一九三九年春ゾルゲはモスクワに、ヒトラー軍のポーランド侵攻は九月一日だと伝えた。その後の事ナラ（ナルヴァ）に接近し、首都を西北から脅かすようになった。パンフィーロフ師団は死闘を繰り広げ、モスクワ補充隊も戦力差の大きい戦場で死んでいった。主婦も、学生・生徒も（モスクワ市西南の）キエフ駅にバリケードを構築した。

この祖国にとって苦難の時期に、コミュニストのゾルゲと恐れを知らぬ同志たちは、またもソ連国民にこのうえない貢献をした。日本軍部が戦争開始のために戦力を太平洋に集中し、ヒトラー軍は赤軍との戦争に集中すると確信させる情報を伝えたのである。満洲の関東軍がソ連が東方国境に引き続き大部隊を貼りつけざるをえなかったにもかかわらず、極東から一部師団を再配置することを可能にした。モスクワ防衛戦に、ヒトラー軍の崩壊のはじまりである敗戦に貢献したのは、ソ連国民であり、同志ゾルゲだった。彼自身は、この時点までに逮捕され、監獄に収容されていた。

日本の秘密警察は早くから、ドイツ大使館内にかよからぬことがあるようだと言っていた。しか

態はまもなく、その情報の正しさを立証することになった。

一九四一年四月にゾルゲはモスクワに、ヒトラー軍のソ連攻撃準備の貴重な情報を伝えた。ソ連国境には一五〇個師団が集中し、ヒトラー軍の展開する軍事情報の見取り図を示していた。開戦は当初一日違っていたが、しばらくして、六月二二日という正確な情報が入った。同様な情報は、別ルートからもモスクワに届いたが、スターリンはこれに関心を払わなかった。

もしゾルゲその他の情報が金庫に蔵われなければ、数百万の犠牲者は救われたであろう。ああ、個人崇拜の悪弊と不可分の人々への不信、無関心の代価を支払わなければならなかった。

ヒトラーの大軍はモスクワに迫った。一九四一年の悲劇の秋を思い出す人は、ソ連国民にとっていかに困難な時だったかを知っている。撃破されたエリニヤ、燃え尽きたユーフノフ（モスクワ西南一五〇キロ、カルーガ州都）は取り残され、ヒトラー軍は

し、どんなに狡猾で腕利きの警察、憲兵もなにも暴露し、どんなに「コミュニスト」を自称する裏切り者けなかつた。「コミュニスト」を自称する裏切り者すら見つけられず、幕引きということになるかもしれない。ゾルゲの友人たちは次々と拘束され、本人も四一年一〇月に逮捕された。

日本司法当局は戦争が勝っているうちは、ゾルゲのことなど考えもしなかった。しかし、戦局が不利に転換すると、反ファシスト英雄の処置を急いだ。一九四三年ゾルゲ・グループの生き残り（仙台と網走に収監中）に対する非公開裁判が開始された。九月にはゾルゲと尾崎に対して死刑判決がなされた。ほかの者は終身刑だった。

一九四四年一月七日（ロシア革命記念日）に、東京巣鴨刑務所で死刑が執行された。刑吏が縄を締める寸前に、ゾルゲは叫んだ「共産党、ソ連邦、赤軍万歳」と。

*

その半年後、勝利の旗がドイツ国会議事堂に翻って、ヒトラー・ドイツは降伏した。九月には軍国主



多磨霊園内に立つゾルゲの墓(東京都府中市)

義日本も打倒された。

ニコルンベルクでは、ゾルゲが果敢に闘ったヒトラーの戦争犯罪者たちが裁判にかけられ、被告席に着かされた。東京では、有能なソ連諜報員および日本愛国者と闘った日本人戦犯(東條英機以下)が裁判にかけられ、(同じ巢鴨刑務所で)死刑に処せられた。

ファシズム打倒という偉大な事業の祝典は終わり、ゾルゲと同志たちが命を捧げた、長く待ち望まれた平和がやってきた。しかし、闘いは終わらなかった。

チャーチルは、悪名高いフルトンでの演説で「冷戦」の風を吹かせた。アメリカのプロバガンダは、反ソ・キャンペーンを燃え立たせるためにゾルゲの名を利用した。仮面を被った日本軍国主義者は、諜報員を助した愛国者、反ファシストを中傷した。スターリンは、ゾルゲを回想しないことにした。

しかし、名誉ある諜報員の思い出は友人たちの心に生き続けた。日本では石井花子さんだった。「私はコミュニケーションではありませんが、反ファシストには共感していました。ゾルゲは私のことを『赤いお嬢さん』と呼んでいました」。

ゾルゲは死後、刑務所墓地の一般墓所に埋葬された。石井さんは上級審に訴えず、多くの妨害にもかかわらず、遺体の改葬を願って許可された。遺体は火葬され、友人たちが多磨霊園に埋葬した。ここ

である。

灰色の花崗岩には「ここに、反戦と世界平和に命を捧げた英雄が眠る。一八九五年バクーに生まれ、一九三三年来日、一九四一年逮捕され、一九四四年一月七日に処刑された」とある。いかにも、同志ゾルゲは、社会主義と平和の偉大な事業に貢献した真の英雄、勇気ある反ファシスト戦士だった。

*

リハルド・ゾルゲは物語、書籍、歌謡、映画に生きている。まもなくモスクワでは、映画『ゾルゲ博士、貴方は何者か?』が上映される。有名なフランスの監督、脚本家イヴ・シャンピがフランス、イタリア、日本の映画会社と協力して制作した(夫人が日本の女優岸恵子)。

この映画は史実に基づき、偏見なくソ連諜報員の英雄的活動を描いている。世界中で放映され、主人

公は数百万の観客を感動させ、驚嘆させている。各国で映画評論が書かれている。

われわれはむろん、ゾルゲを知り、愛した人々にも質問した。映画は、多少は主観的などころもあるが、真実を描いている。ある人は欠点として、主人公像が若干歪曲され、時に神経質で自制を失うように描かれている点を挙げる。ゾルゲは堅固で、穏やかで、勇敢だから人々の心に残るのだと言いたいらしい。

われわれが多磨霊園を去るとき、石井花子さんは微笑みながら「ゾルゲは出逢いにとても満足したようです」と言った。白髪の女性は、自分の一生を捧げた友が生きているかのように語った。われわれは驚かなかった、同志ゾルゲのような人物は死なないのだから。

※この文章は本邦初訳だが、一九五五年一月七日の最初の墓参の様子は石井自身が回想している。参加者は尾崎秀樹、川合貞吉、細川嘉六、長谷川浩、神山茂夫、中西功、石堂清倫だった(石井「人間ゾルゲ」二九二―二九五)。

序言——本書の研究史上の意義

3

1章 満洲事変と日ソ関係

1 五カ年計画とソ連の情勢認識

34

計画達成・重工業化の優先／対ソ戦争警戒の外交政策／駐日大使館と日本の親ソ派

2 日本軍部の対ソ政策

43

満洲事変と「満洲国」建国／対ソ戦争の構想／中東鉄道をめぐる攻防

3 ソ連の軍備強化・近代化

63

ソ連軍の五カ年計画／独ソ軍事協力の結実／ソヴェト愛国主義の醸成

2章 ヒトラー政権と日独協力の実現

1 集団安保外交と人民戦線

78

リトヴィーノフと仏ソ提携／コミンテルンと人民戦線／二・二六事件——ゾルゲの評論

2 スペイン戦争への独ソ介入

93

独伊の積極的介入／英仏の「不干渉」政策／ソ連の介入と「肅清輸出」

3 日独防共協定へ

103

日独防共協定交渉／日中戦争と中ソ不可侵条約／ミュンヘン会談と対独宥和

3章 日ソ間諜報戦と赤軍粛清

1 満洲における諜報戦 118

満洲における日本特務機関／オゲペウとグルーの諜報活動／極東赤軍諜報部の活動

2 ゾルゲ諜報団の活動 132

在日レジデントウーラ／ゾルゲ情報の価値／日本人エージェントの役割と貢献

3 ソ連軍首脳部の粛清 153

トウハチエフスキー裁判／ブリュッヘル裁判／ベルジンらグルー首脳部の粛清

4章 独ソ開戦・日本の北進をめぐる攻防

1 張鼓峰事件とノモンハン戦争 166

張鼓峰事件／リュシコフ亡命事件／ノモンハン戦争とソ連・フィンランド戦争

2 独ソ不可侵条約と三国同盟 184

独ソ不可侵条約の衝撃／三国同盟締結と日独の確執／ソ連軍の改革と対独戦準備

C 日本の南進決定と諜報団壊滅 206

独ソ開戦と関東軍特種演習／スターリンの極東兵力西送決定／ゾルゲ諜報団の壊滅

結語

I	ゾルゲ映画のドラマ性と歴史実証性	29
II	ハルビンでの諜報戦	123
III	妻カーチャへの手紙	141
IV	スターリンの軍事知識	205
V	まだ解かれていない杉原千畝の謎	208
VI	ソ連の対独諜報団「赤い楽団」	217
VII	真珠湾攻撃とソ連の衝撃	220

あとがき 236

人名索引 i

資料出典・参考文献など iii

表 1	ソ連における政府・保安機関の変遷	26	表 2	引用資料出典一覧	30
表 3	第2次五カ年計画期の軍備増強	65	表 4	戦間期における主要国の友好・敵対関係	94
表 5	1939年夏の列国戦力	185	表 6	ゾルゲ事件被検挙者一覧	224
図 1	ゾルゲのアジト	149	図 2	ノモンハン戦争における両軍の部隊配置(8月20日～28日)	179
図 3	縦深作戦概念図	200			

【凡例】

- ・人名…ロシア人については正式には名・父称・姓だが、父称は割愛し、名も「スターリン」のように簡略に表記する。ヴォロシロフはヴォロシロフなどとする。
- ・地名…正しくはマスコヴァ、ウラジヴァストークなどの発音の表記も、慣用に従いモスクワ、ウラジオストクなどとする。
- ・機関名…ソヴィエト国家の建前上、省庁⇨人民委員部、大臣⇨人民委員、次官⇨人民委員代理と呼ばれたが、一九四六年以降は欧米と同じ呼称になった。
- ・仮名遣い…ソルゲの二つの論文和訳や日本外交文書などは旧字体が混じり、言いまわしが当時のものなので、読者のために書き改めてある。
- ・本文の叙述…本文は、書下ろし以外に著者の旧著と他者の参考文献の重要箇所を短縮し、パラフレイズしたものもある(段落末尾に書名と頁数を示したのも、通常の引用註ではない)。

【用語】

《日本・ソ連・ドイツ軍の編制と階級》基幹単位は師団と大隊

・日本軍

編制…①方面軍・軍・師団(平時九〇〇〇)・旅団・連隊・大隊(一〇〇〇)・中隊・小隊・分隊

②方面軍(関東軍、支那総軍、南方総軍)・軍(関東軍に第一、第三方面軍、北海道・樺太・千島は第五方面軍、南方総軍に比島方面軍、ビルマ方面軍)

階級…大将、中将、少将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉

・ソ連軍

日本の編制に軍団を加える。方面軍(スターリングラード、第一⇨四ウクライナ、第一⇨三白ロシア、ザバイカル、第一極東、第二極東など)・軍⇨三個軍団・軍団⇨三個師団・師団(平時七五〇〇、戦時は砲兵旅団、戦軍連隊等を含め一万二〇〇〇)⇨三個連隊・連隊⇨三個大隊(一〇〇〇人)。師団長は中・少将、上級司令官は大将、上級大将、中隊長は中尉、上級中尉。

・ドイツ軍

師団以下はソ連と同じ。ただし、独ソ戦初期では北方軍集団⇨二個軍プラス一個装甲集団、中央軍集団⇨二個軍プラス二個装甲集団、南方軍集団⇨三個軍プラス一個装甲集団。階級はソ連と同じ。

《ソ連諜報・防諜機関》

- ・内務人民委員部(NKVD)…共和国ごとだったが、一九三四年連邦全体の機関になった。ただし当初から、一般警察・消防・市民登録なども担当していた。
- ・国家保安部(GPU⇨ゲベウ)…前身は内戦中の「反革命・投機取締り全ロシア非常委員会」⇨チェカー。一九二二年連邦結成時に合同国家保安部⇨OGPU(オゲベウ)、さらに一九三四年にNKVD下のGUGB⇨国家保安総局になった。戦時中NKGBが独立、うち軍事防諜部は国防人民委員部NKOの防諜担当と合同して、スメルシュ(俗称「スパイに死を」)となった。
- ・労農赤軍参謀本部諜報総局(GRU⇨グル)…NKVDとは別個の機関
- ・ソ連保安機関の高位階級…一等保安コミッサール(陸軍上級大将相当)、二等保安コミッサール(陸軍大将相当)、三等保安コミッサール(陸軍中将相当)。

表1 ソ連における政府・保安機関の変遷

年	政府・保安機関	備考
1917.11	新たなロシア政府として人民委員会議(SNK)設置	議長=首相(初代はレーニン)。ほかに外務、陸海軍、財務、農業、交通など
1918	内戦開始。内務人民委員部(NKVD)、非常委員会(ChK)設置	内務:警察、消防、市民登録、国境警備など
1922.04	ChKを国家保安部(GPU)に改称し、NKVDの部局となる	ChK、GPU:政治(保安)警察 *チェキスト、ゲーバウー名称が一般化
1922.12	〈ソ連邦成立〉(ロシア、ウクライナ、ベロロシア、ザカフカス)。GPUがNKVDから独立し、合同国家保安部(OGPU)となる	
1924.07	〈憲法採択〉(外務、陸海軍等は連邦に、内務、農業などは各共和国に)	
1930.12	OGPU下に矯正労働収容所(ITL)が発足	L=ラーゲリ
1934.07	連邦内務人民委員部(NKVD)設置。OGPUはNKVD直轄の国家保安総局(GUGB)に改称	陸海軍人民委員部→国防人民委員部(NKO)
1936.12	〈憲法改正〉11共和国=ロシア系3、ザカフカス3、中央アジア5	36-38年大テロル
1941.03	NKVDからGUGBの後継機関である国家保安人民委員部(NKGB)が一時分離→4月に再統合	
1941.06	独ソ戦開始にともない、国家防衛委員会(GKO)設置	議長はスターリン。SNKと共産党政治局の権能を併せ持つ最高機関
1943.04	NKGBが再度分離、うち軍事防諜部は国防人民委員部(NKO)下に(通称スメルシュ)	
1945.09	GKO解消	
1946.03	省制度移行(閣僚会議、首相、大臣)にともない、国家保安省(MGB)と内務省(MVD)を設置	
1953.03	スターリンの死去により、MVD・MGB再統合	
1953.06	ベリヤ処刑によりITL縮小、囚人解放→「雪解け」へ	
1954.02	国家保安委員会(KGB)設置	
1991.12	〈ソ連邦解体〉	
1992	ロシア連邦保安庁(FSB)設置	

* GULag(グラグ)=矯正労働収容所管理総局/GUPVI(グブヴィ)=捕虜・抑留者業務管理総局はともにNKVD管轄

《特殊用語》

・ 諜報要員(機関員)・・・本部と世界主要都市に存在

・ エージェント・・・手先または協力者

・ レジデントウーラ・レジデント(各国常駐要員)の居所で、合法レジデントは表向き大使館、領事館、通商代表部の職員。非合法レジデントの居所は「アジト」(戦前の「アジトプロブ」煽動・宣伝拠点)と意識するのが適切だと思われる。

・ 諜報団(スパイ・グループ)・・・警察側の呼称だが、レジデントと少数のエージェントから成る。本件の場合、非合法レジデントはゾルゲ、クラウゼン、ウーケリッチで、尾崎秀実、宮城与徳は有能なエージェントである。しかし、警察側は逮捕者と有罪者を拡大して「ゾルゲ諜報団」と呼び、ほとんどなにもしていない安田徳太郎まで有罪判決を受け、服役させられた。

・ 肅清(チーストカ)・・・共産党内部からの素行不良または階級的異分子の定期的な清掃を意味していた(党員証の点検・交換の形式で)。ところが一九二〇年代末からスターリンは秘密警察を権力闘争の手段として導入、乱用し、多くの人々を処刑し、数百万もの人々を収容所に入れるようになった。これは「テロル」(フランス革命時の恐怖政治)の大規模版である。

・ 縦深作戦・・・第一次世界大戦緒戦にみられたような、砲撃に続いて歩兵と騎兵が横一直線になっていっせいに敵に突撃する戦法が、機関銃の多用により犠牲者を増やし、戦車と塹壕の登場によって無意味化したことの反省から生まれた。大戦後の軍近代化にともなう戦車と航空機の主役的活用は欧米列強によって推進されたが、この用語はイギリスのフラワーが一九一八年末に(大戦が終わるや)最初に用いた。ソ

ソルゲ映画のドラマ性と歴史実証性

ソルゲに関するロシア映画『スパイを愛した女たち』(2019年)の日本版を観た。「卓越した諜報員ソルゲの活動と女性遍歴」ともいうべき映画で、史実に即していないどころか、無関係の事柄を無理やり繋ぎ合わせてドラマ仕立てにした点が、歴史家としては不満である。

・日本の取り調べ機関に、ロシア語で「日本諜報機関」を当て、しかも「特高」とするのは誤り。内偵調査と逮捕は警視庁外事課と陸軍憲兵隊(防諜機関)が行い、特別高等警察(思想・国事犯対象)が登場するのは被告の取り調べ段階である。

・1938年6月に日本に亡命した内務人民委員部極東本部長リュシコフに対するドイツ紙記者ソルゲの単独取材は、いかに同盟国大使館のお気に入りとはいえ、ありえなかった。ましてや、ソルゲが日本人のいる前では「総統を侮辱した」と怒り、2人きりだと「裏切り者」「人間の屑」と罵ったシーンは、ソルゲは愛国者だと強調したいがための作り話である。

・スターリン、ウォロシーロフ、ペリヤがリュシコフ殺害を決定し、それを暗号電信でソルゲに命ずると、「諜報団の任務ではない、やれと無理強いするなら団を解散する」と返電したシーンがあるが、これも作り話である。

・この映画で奇妙な存在は、ソルゲに忠実な手足のように動く部下で、ある時は人力車車夫、別の時は紳士に化ける小柄の、しかし武芸に秀でた男である。彼がサボイ・ホテルの3階からリュシコフを突き落として殺害したシーンがあるが、リュシコフは終戦のどさくさに紛れて、大連で日本軍特務機関将校に「用済み」として射殺された。

・尾崎秀実がソルゲの右腕、日本情勢の「知恵袋」だったことが過小評価されており、日独伊三国同盟条約に「日本の自動的な参戦義務なし」とあるのをドイツ側が変えようとして果たせなかったことに関連して触れられたいである。

・「舞台装置」はよく整っている。銀座のソルゲお気に入りの酒場ラインゴールドでは、大流行歌「リリー・マルレーン」がドイツ語で歌われた点、銀座の街並みがカラー化されており、それでいて人力車が乗用車より便利な交通手段で、役者「エノケン」の職のぼりが立っていたりする点である。

連では、トリアンダフィロフ、トゥハチエフスキーらの戦略家が「縦深作戦術」を練りあげ、一九三六年の「赤軍野戦教令」に結実した。

緒戦において、まず長距離砲の砲撃と航空機による爆撃で敵陣数十キロの奥深くまで打撃を加え、敵前線部隊を打破するとともに、後方の予備部隊も弱体化してから、戦車を中心とする機甲部隊と歩兵部隊が突撃し、空挺部隊も後方に降下して一挙に敵陣奥深く蹂躞、占領するというものである(トゥハチエフスキーは縦深五〇キロ以上を想定)。これは数個師団以上を動かす大規模なものであり、戦略的要衝を獲得する性格なので、個々の戦場における戦術と、戦争の帰趨にかかわる戦略との中間の、両者を結節する作戦レベルの概念として、ソ連では「縦深作戦術」と呼ばれるのが慣わしだった(200ページに図解)。

なお、縦深作戦が最初に用いられたのは、ノモンハン戦争だと一部のソ連文献はいうが、やはり独ソ軍事交流の相手ドイツであり、ドイツのポーランド攻撃、フランスなど西方への進撃、そして対ソ・バルバロッサ作戦である(グデーリアンが指揮)。ソ連が用いるのは対独反攻においてであり、領内の大都市やワルシャワなどにおける作戦は、兵員数で一〇〇万、戦車数千両の大規模なものであった。

表2 引用資料出典一覧

個々の資料は、本文の理解を助けるため付近に適宜配置し、読みやすいように二段組みにしてある。資料は本文の叙述を裏付け、または、本文では細かす

	名称と概要	発信者	受信者
①	ゾルゲとは誰か——追悼文から		
②ア	1933年9月から35年7月までの活動報告(1935.07.28)	ラムザーイ	ペールジン
イ	エージェントの活動に関する本部への説明(1935.08.03)	ラムザーイ	本部
ウ	ポクラードクのゾルゲ評(1935.08.05)	ポクラードク	
エ	在日レジデントウーラの任務(1935.08.13)	本部	ラムザーイ
③ア	トゥハチェフスキーの戦車生産促進意見(1934.06.28)		スターリン
イ	同上、高速爆撃機追加注文(1935.02.03)		同上
ウ	ウォロシエーフ、赤軍機甲化認めながら騎兵擁護(1935.09.16)	ウォロシエーフ	スターリンら
④	ゾルゲ「東京における軍隊の反乱」(1936.05)		
⑤ア	日独防共協定交渉の難航(1936.05.31)	ラムザーイ	本部
イ	ウリツキーによるドイツ対日消極化の評価(1936.07.20)	ウリツキー	ウォロシエーフ
⑥ア	独中・日独関係に対するオットの見方(1937.10.08)	ラムザーイ	本部
イ	ゾルゲの日の中戦争論評(1937.12.14)	ラムザーイ	
⑦ア	極東赤軍のソ連極東防衛に関する報告(1937.03.27)	ラーピン	
イ	『極東赤軍諜報報告』第5号抜粋(1937.07.26)		
ウ	ヴークリッチの記事「日本の独伊連合への参加」(1937.01.03)	ヴークリッチ	
⑧ア	シロートキンのラムザーイ人物評価(1936.03)	シロートキン	本部
イ	本部によるラムザーイへの活動上の指示(1936.05.15)	本部	ラムザーイ
⑨ア	ポクラードクのゾルゲ告発(1937.08.17)	ポクラードク	エジョーフ
イ	ゾルゲの本部長への帰国願(1938.03.26)	ラムザーイ	本部
⑩ア	リュシコフの特別記者会見(1938.07.13)	ラムザーイ	本部
イ	ソ・フィン戦後のドイツの対日不安(1940.02.01)	ラムザーイ	本部
⑪ア	独ソ不可侵条約の日本への衝撃(1939.08.24)	ラムザーイ	本部
イ	駐日ソ連武官の本部への報告(1939.08.26)	クイローフ	本部
⑫ア	軍事同盟格上げ交渉における日本側留保(1940.06.24)	ラムザーイ	本部
イ	ゾルゲが得た三国同盟締結交渉の情報(1940.09.15)	ラムザーイ	本部
ウ	モーロトフが駐日大使に中立条約締結示唆(1940.11.19)	ラムザーイ	本部
エ	大島が同盟強化、シンガポール攻撃を主張(1941.01.18)	ラムザーイ	本部
オ	グルー駐ソ米国大使、真珠湾奇襲を警告(1941.01.27)	ラムザーイ	本部
カ	ドイツ国防軍統合司令部司令「対日協力」(1941.03.05)	ラムザーイ	本部
キ	近衛首相がドイツを訪問する松岡外相に注文(1941.03.10)	ラムザーイ	本部
ク	大島駐独大使の本省への意見具申(1941.04.16)	大島浩	外務本省
⑬	スターリンが対独戦略転換を指示(1940.04.21)		
⑭ア	ソ連在ベルリン諜報員の独軍侵攻準備情報(1941.05.09)		
イ	ラムザーイの入手したドイツ軍集結状況(1941.05.21)		
ウ	在ケーニヒスベルク杉原領事の本省宛電報(1941.06.10)	杉原千畝	外務本省
エ	在ベルリンNKGB要員の報告(1940.06.11)		
オ	日本外務省の独ソ開戦の情勢判断と対処方針(1941.06.23)	日本外務省	
カ	日本外務省の対ソ外交交渉要綱(1941.08.04)	同上	
キ	赤軍参謀本部諜報総局特別報知(1941.08.20)関特演	本部	
ク	同上(1941.08.29)日本支配層の動向	本部	
⑮	オット大使の日本参戦断念(1941.09.11)	インソン=ゾルゲ	本部
⑯	ゾルゲ諜報団検挙(1941.10.30)		本部

※数字は頁数を示す。k1は第1冊。公文書館の分類は、F = Fond(書庫)、Op = Opis(目録)、D = Delo(ファイル)、L = List(枚目)、Ob = 裏面)。

ぎることを補足したものと理解し、本文を一瞥してから読まれ、必要があれば本文に立ち返るようにされたい。

掲載誌、頁(年月日)	備考	本書掲載頁
Pravda, 1964.09.04	ブラウダ	11
M.A. k1,343	M. アレクセーエフ	56
A.F.80-83	A. フェシュン	57
M.A. k1,350		58
A.F.85-88		59
RGASPI. F.558. Op.2. D.113. L.16-16Ob	社会政治史公文書館	68
RGASPI. F.558. Op.2. D.118. L.9	同上	69
RGVA.F.74. Op.2. D.37. L.94-99	軍事公文書館	70
Geopolitik, 1936-5	地政学雑誌(みすず書房訳)	86
A.F.113-114		107
A.F.120-122		107
A.F. 200		111
F.Z紙(筆名)	フランクフルター・ツァイトウング	112
R.A. 74-78	ルースキー・アルヒーフ	129
RGVA. F.33879. Op.1. D.514. L. 187-188		131
ポリティカ紙7面 Vol. 34, No. 10280	山崎洋編著	137
A.F. 98		145
A.F. 108-111		146
M.A. k1,541		162
A.F. 213-215		163
R.A. 148-151		171
R.A. 163		182
A.F. 244-245		187
R.A. 159		187
R.A. 157		189
M.A. k2,155		190
M.A. k2,166-169		193
M.A. k2,287		194
M.A. k2,291-292		195
M.A. k2,304-305		196
R.A. 173-174		197
日本外交文書「第二次欧州大戦と日本」第1冊、357-360		198
ViZh, 2001-3, 95-96	軍事史雑誌	203
1941 god, k2,180-181		209
1941 god, k2,252		210
1941 god, k2,338		210
1941 god, k2,349-350		211
日本外交文書、同上、422-427		212
同上、468-469		213
A.F. 382-383	No.668217	214
A.F. 390-392	No.668313	215
A.F. 386		219
A.F. 396		223

著者

富田 武 (とみた・たけし)

1945年生まれ。東京大学法学部卒業。成蹊大学名誉教授。専門はロシア・ソ連政治史、日ソ関係史、シベリア抑留。著書「スターリニズムの統治構造」(岩波書店、1996年)、「戦周期の日ソ関係」(岩波書店、2010年)、「シベリア抑留者たちの戦後」(人文書院、2013年)、「シベリア抑留」(中公新書、2016年、アジア・太平洋賞特別賞)、「日本人記者の見た赤いロシア」(岩波現代全書、2017年)、「歴史としての東大闘争」(ちくま新書、2019年)、「シベリア抑留者への鎮魂歌」(人文書院、2019年)、「日ソ戦争 1945年8月」(みすず書房、2020年)、「日ソ戦争 南樺太・千島の攻防」(みすず書房、2022年)、「シベリア抑留関係資料集成」(共編、みすず書房、2017)などがある。

組版:キャップス

こうさく にちどく そかんけい
ゾルゲ工作と日独ソ関係
しりょう よ だいに じせ かいたいせんぜんし
資料で読む第二次世界大戦前史

2024年9月20日 第1版第1刷印刷

2024年9月30日 第1版第1刷発行

著者 とみた たけし
富田 武

発行者 野澤武史

発行所 株式会社山川出版社

東京都千代田区内神田1-13-13 〒101-0047

電話 03(3293)8131(営業)

03(3293)1802(編集)

印刷 株式会社シナノパブリッシングプレス

製本 株式会社プロケード

装丁・本文デザイン 黒岩二三[Fomalhaut]

<https://www.yamakawa.co.jp/>

造本には十分注意しておりますが、万一、乱丁・落丁本などがございましたら、
小社営業部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替いたします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-634-15250-2